

「回心」 一使徒行伝講解説教 20-

ヨブ記 42章 1節～6節  
使徒行伝 9章 1節～19節a

説 教 本庄侑子牧師

サウロの回心と呼ばれる箇所をお読みしています。反省して心を改める『改心』ではありません。外から来る神様の力によって、神様の方にくるりと方向を変えられてしまう『回心』です。『悔い改め』という言葉でも訳されます。

先週は大変な1週間でした。嵐の中、「神様、皆さんをどうかお守りください！」と祈り続けざるを得なかったと共に「もういいです神様！」と閉じこもる私がありました。しかし、そんな私が今朝ここに立っています。単なる義務感によるものではありません。回心させられたからです。神様の前にひれ伏して、とけ入るような思いでこの朝を迎えました。

サウロはダマスコに向かっていました。キリスト者を殺すためでした。しかし、突然天からの光がサウロの周りをめぐり照らして、地に打ち倒れ、サウロの目は見えなくなりました。自分には正しいことが見えていると思っていた。でも、本当は何も見えていなかったのです。

イエス様は言われました。「なぜ私を迫害するのか。」(4節)サウロは、間違っているように見えていた人たちを迫害しているつもりでした。しかし実は、イエス様を迫害していたのです。反省して心を改めよう、などと言える次元のことではありません。神様に滅ぼされて当然な恐ろしいことをしていたのです。

私たちが犯すのもこの罪です。平気で隣人を裁きます。その背後には、この時のサウロのような心があります。自分が正しいと思っている。自分が神のようになっている。だから人を裁けるのです。あるいはまた、先週の私のように神様に向かうことをやめてしまう。神様に怒りを抱くまでは良いのです。しかしそこで祈ることもやめてしまう。それは罪です。

サウロは自分の罪を照らし出されて打ち倒されました。しかし、話はそこで終わりませんでした。「サウロ、サウロ」(4節)と自分の名前を呼んでくださるイエス様の声を聞いたからです。サウロのためにも十字架にかかって復活して下さり、サウロの罪を赦すだけでなく、未来を与え、なすべき務めを与えてくださるイエス様の憐れみの声でした。

サウロの目は見えないままです。これからの歩みが自分の目で判断するものではなかったからです。罪の目には見えていなかった本当になすべきこと、神様がサウロに用意してくださっている務めを示した上で、サウロの目は再び開

かれることとなりました。先週、私自身何度もダマスコ途上を歩かされました。天からの助けに取り囲まれ、私の名を呼び続けてくださるイエス様の声を聞いて、目が開かれていきました。

東京神学大学の卒業式で語られたヨブ記42章の説教を読みました。「それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います。」(6節)自分のエゴから解き放たれて神様のみ前にとけ入る、自分自身の行為に対して申し訳なさに苦しみ、生き絶えて死ぬばかりになる、そんな態度だと書かれていました。「皆様が遣わされるそれぞれの場所で、本当に主の前に、主のみ言葉の前に、繰り返してエゴが崩れ去り、絶え入る生涯を送っていただきたい。」そう語られていました。

イエス様の姿が改めて迫って来ました。神である方がこの地に人として生きて、人の罪を代わりに背負って死んでくださった。この究極の不条理を身に受けてくださった方がイエス様です。このイエス様の前にあっては、あらゆる不条理の中でも、そこに神様が共にいてくださること、終わりの日には明らかにされる永遠の意味が確かにあるということが示され、悔い改めずにはいられなくなります。

ヨブは悔い改めた後、失った以上のものを与えられました。しかし、死んでしまった家族、失ってしまったものは帰ってきません。しかし、死から復活させられたイエス様の手や脇には傷痕が残ったままでした。イエス様ご自身が不条理によって受けた傷を負ったままで復活されました。ここに、新しい将来が与えられたとしても絶対に埋めることができない喪失への慰めを見るのです。

この礼拝こそがサウロも通ったダマスコへの道です。天からの光にめぐり照らされ、イエス様が深い慰めをもって会いに来てくださる回心の場所です。教会は、この世で経験されるあらゆる不条理を背負いながら、この世を代表するようにして神様に向かって祈り続けます。終わりの日を待ち望む希望の中で、神様と格闘するようにして祈り続けながら、私たちの思いをはるかに超えた仕方で今もこの地で生きて働いておられる神様に用いられて生きていくのです。

私たちが招かれたのも、この旅路です。どのような道に導かれようと、この旅路には神様の栄光が照り輝いています。

(記 説教要約奉仕者)